

王羲之と王導について

——『世説新語』を中心として——

はじめに

五世紀の中頃、東晋時代に続く南朝の劉宋（420～479）の時代に、『世説新語』は武帝の劉裕（363～422）の甥である臨川王劉義慶（403～444）によって編纂されたと言われる。

小話集の形式をとる『世説新語』（以下略して『世説』と称す）は、内容によって三十六篇に分類し、全体の小話数は一一三〇話掲載され、延べ七八八人の登場人物によって構成されている。

王羲之（307頃～365頃）に関する小話は、その内四十六話が掲載（表1・表2参照）されていて、全体の小話数（一一三〇話）の四・〇％となり、同じ四十六話の東晋の征南大將軍、江州刺史を歴任し、謀叛を起して失敗した羲之の伯父の王敦（266～324）

〈表1〉

14	14	13	12	10	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
桓玄	周顗	王戎	王衍	王羲之	王敦	支遁	殷浩	王濛	司馬昱	庾亮	劉惔	王導	桓温	謝安
(369 ～ 404)	(269 ～ 322)	(234 ～ 305)	(256 ～ 311)	(307 ～ 365)	(266 ～ 324)	(314 ～ 366)	(? ～ 356)	(309 ～ 347)	(320 ～ 372)	(289 ～ 340)	(? ～ ?)	(267 ～ 330)	(312 ～ 373)	(320 ～ 385)
三四話	三四話	三六話	四二話	四六話	四六話	四九話	五〇話	五七話	五八話	五九話	七六話	八七話	九四話	一一四話
(三・〇％)	(三・〇％)	(三・二％)	(三・七％)	(四・〇％)	(四・〇％)	(四・三％)	(四・四％)	(五・〇％)	(五・一％)	(五・二％)	(六・七％)	(七・七％)	(八・三％)	(二〇・二％)

塚 本 宏

表2 『世説新語』の中の王羲之と王導

(注)両者の小話欄の数字は小話の番号を表す。※印は両者が登場する小話

合計	下 卷															中 卷										上 卷			卷								
36 篇	仇隙第三六	惑溺第三五	紕漏第三四	尤悔第三三	譏險第三二	忿狷第三一	汰侈第三〇	儉嗇第二九	黜免第二八	佞諂第二七	輕詆第二六	排調第二五	簡傲第二四	任誕第三三	龍礼第三二	巧芸第三一	術解第三〇	賢媛第二九	棲逸第二八	傷逝第二七	企羨第二六	自新第二五	容止第二四	豪爽第二三	夙慧第二二	捷悟第二一	規箴第二〇	品藻第十九	賞譽第十八	識鑒第十七	雅量第十六	方正第十五	文學第十四	政事第十三	言語第十二	德行第十一	篇 名
1130 話	8	7	8	17	4	8	12	9	9	14	33	65	17	54	6	14	11	32	17	19	6	2	39	13	7	7	27	88	156	28	42	66	104	26	108	47	小話数
46 話	5					2	12			7	※5・※8・19・20	54・63						25・26・31	6		3		※24・26・30				20	※28・29・30・47・55・62・75・85	55・72・77・80・88・92・96・100・108・120・141	※19・28	25・61	36		62・69・70		王羲之の小話	
	(1)					(1)	(1)			(1)	(4)	(2)						(3)	(1)		(1)		(3)			(1)	(8)	(11)		(2)	(2)	(1)		(3話)	(小話数)		
71 名	1					1	1			2	7	3						7	1		1		5				2	14	16		2	3	2		3 名	登場人物	
87 話		7	4	5・6・7		1	7				4・※5・6・※8	10・12・13・14・16・17・18・21	7	23・24・32	1		8		4	6	1・2		15・16・※24・25・28		5	11・14・15	6・13・16・18・20・23・26・28・43	37・40・46・47・54・57・58・59・60・61・62	11	8・13・14・16・19・22	23・24・22	21・36・37・39・40・42・45	12・13・14・15	31・33・36・37・40・102	27・29	王導の小話	
		(1)	(1)	(3)		(1)	(1)				(4)	(8)	(1)	(3)	(1)		(1)		(1)	(1)	(2)		(5)		(1)	(3)	(9)	(11)	(1)	(6)	(8)	(2)	(4)	(6)	(2話)	(小話数)	
180 名		2	3	8			2	1				11	9	2	6	1		1	3	2	4		13			2	3	45	21	1	8	12	5	4	7	4 名	登場人物

〈表3〉 王導の小話の登場人物

篇 名	登 場 人 物 名 (数字は小話の番号)
德行第一	27周鎮・29王悦・敬予・曹夫人
言語第二	31周顗・33顧和・36温嶠・37王含・顧和・40周顗・102王珣
政事第三	12任・胡人・13陸玩・14庚亮・15(なし)
文学第四	21(なし)・22殷浩・桓温・王濛・王述・謝尚
方正第五	23司馬睿・周顗・24陸玩・36横塘・匡術・37庚亮・孔坦・39梅頤・陶侃・40蔡謨・42江彬・45竺法深
雅量第六	8王衍・13庚亮・14(なし)・16許瑗・顧和・19郗鑒・王羲之・22顧和・周顗
識鑒第七	11諸葛恢
賞誉第八	37王衍・40庚琮・46王敦・司馬睿・王舒・王邃・王衍・王澄・47周顗・54刁協・戴儼・卞壺・57祖約・58王敦・揚朗・楊准・59何充・60何充・61劉疇・62王述・王承
品藻第九	6荀淑・陳寔・荀靖・陳諶・荀爽・陳紀・荀彧・陳群・荀顗・陳泰・裴徽・王祥・裴楷・王衍・裴康・王綏・裴綽・王澄・裴瓚・王敦・裴遐・裴頠・王戎・裴邈・王玄・13虞駿・孔愉・丁潭・16周顗・和嶠・18王穎・王敞・20王承・阮瞻・王衍・23王述・庚亮・王承・王湛・26謝尚・何充・28王羲之・劉綏・43劉惔・王濛
規箴第一〇	11司馬睿・14郗鑒・15顧和
捷悟第一一	5王敦・温嶠
容止第一四	15王衍・王戎・王敦・王詡・王澄・16衛玠・24庾亮・殷浩・王胡之・王羲之・25王恬・28王劭・桓温
企羨第一六	1桓彝・2裴頠・阮瞻・羊曼
傷逝第一七	6衛玠・謝鯤
棲逸第一八	4李廞・李重・李式
術解第二〇	8郭璞
寵礼第二二	1司馬睿
任誕第二三	23祖逖・庾亮・24孔群・32王濛・謝尚・王戎
簡傲第二四	7高坐道人・卞壺
排調第二五	10陸玩・12諸葛恢・13劉惔・14周顗・16王悦・17司馬紹・周顗・18周顗・21康僧淵
輕詆第二六	4庾亮・5王敦・庾亮・王羲之・6蔡謨・王承・阮瞻・蔡克・8王羲之・王彪之
儉嗇第二九	7王悦
汰侈第三〇	1石崇・王敦
尤悔第三三	5王澄・王敦・6王敦・周顗・7温嶠・司馬紹・司馬昭・司馬懿
糺漏第三四	4任瞻・司馬炎・王戎
惑溺第三五	7蔡謨・雷尚書

王導（267～330）、字は茂弘、臨沂（山東省）の人、王敦（266～324）の従兄弟であり、羲之の伯父（即ち、王導の父王裁と、羲之の祖父王正とが兄弟）である。東晋の元帝司馬睿（276～322）を輔佐し、東晋創業に功を建て、丞相、太傅を歴任した業績は資料の上でも語られている。また、元帝に深く委寄せられたので、朝野、仲父と呼ばれ、別に阿龍、王丞相、王公、冶城公などと呼ばれていた。

『晋書』卷六十五には

王導字茂弘、光祿大夫、覽之孫也。父裁、鎮軍司馬。導少有風鑒、識量清遠。年十四、陳留高士張公見而奇之、謂其從兄敦曰、此兒容貌志氣、將相之器也。初襲祖爵即丘子。司空劉寔尋引為東閣祭酒、遷祕書郎、太子舍人、尚書郎、並不行。後參東海王越軍事。

とあり、十四歳のときにその才の鋭さが認められ、容貌や志気は將相の器の人物として注目されていた。そして、さらに、

時元帝為琅邪王、與導素相親善。導知天下已亂、遂傾心推奉、潛有興復之志。帝亦雅相器重、契同友執。帝之在洛陽也、導每勸令之國。會帝出鎮下邳、請導為安東司馬、軍謀密策、知無不為。

とあり、元帝が琅邪王であったとき、王導とは親しく、既に天下が乱れていたことを察知した王導は再興に心を傾け元帝の為に尽くそうとした。そして、王導は安東司馬に請われ、軍謀密策についてはわからないことなく、その才は見事なものであった。そして、元帝が王導にむかって言うには、「卿、吾之蕭何也。」とある。即ち、「あなたの存在は、漢代の初代の丞相で漢の三傑の一人と言われた漢の高祖の功臣の蕭何である。」と賛えている。漢の三傑とは蕭何、張良、韓信のことである。

王導について、『中國人名大辭典』では、

覽孫。字茂弘。少有風鑒、識量清遠。元帝為琅邪王時、導知天下已亂。勸王収賢俊與共事。深見委仗。朝野號曰仲父。及即位、以為丞相。桓彝初過江、見朝廷微弱、憂懼不樂。往見導、還曰、向見管夷吾、而無憂矣。過江人士、每至暇日、相要出新亭飲宴。周顗中坐而歎曰、風景不殊、舉目有河山之異。皆相視流涕。惟導愀然變色曰、當共勦力王室、克復神京、何至作楚囚相對泣耶。後受遺詔輔明帝、又受明帝遺詔輔成帝。歷事三朝、出將入相。導功為多、官至太傅。卒諡文獻。とある。

さて、『世説』における王羲之と王導の関係は、次の〈表2〉によってその全貌がわかるが、二人が互いに登場する小話はわずかに五話である。『晋書』王羲之伝に

王羲之字逸少、司徒導之從子也。

とあり、「導之從子」にしては少ない数である。「從子」は甥の意で、司徒の役の王導の甥である。二人の年令をみると、約四十歳の違いがあり、王導がこの世を去ったのは羲之が約二十三年歳るときである。従って二人が生存中に会っていると思われる年数は計算の上では二十三年間であるが、羲之の幼児期を考えると二十年以内であることは明白である。

この表〈表2〉でわかる二人の接点は、※印の五話である。

王導の小話数は全体で八七話であるから、王導の全体の5・7%の小話に羲之は登場していることになる。その五話とは次の各小話である。即ち

- (1) 雅量第六——19
- (2) 品藻第九——28
- (3) 容止第十四——24
- (4)・(5) 輕詆第二十六——5・8

また、次の〈表3〉は、王導の小話に登場した人物のリストである。人物名の上の数字は各篇の中の小話の番号である。そして、〈表4〉は、王導の小話の中に登場する人物の小話数をまとめたもので、() 内の百分率は王導の小話数八七話に対する数字である。順位を見ていくと、一位が東晋の尚書左僕射の周顗で10話(11・4%)、二位が王導のいとこで征南大將軍・

江州刺史の王敦で9話(10・3%)、三位は東晋の尚書令の顧和、東晋の右軍將軍・会稽内史の王羲之、西晋の尚書令・司空の王衍の三名で各5話(5・7%)、六位は司馬睿(元帝)・王澄(王衍の弟で西晋の荊州刺史)・王承(王湛の子で王述の父・西晋の驃騎參軍・東海太守)・王戎(王衍のいとこで竹林の七賢の一人・西晋の荊州刺史)・庾亮(中書令・予州刺史・江荊子三州刺史)の五名で各4話(4・5%)となる。十一位が王悦ほか八名、二十位が殷浩ほか九名、そして三十位が周鎮ほか七五名となる。

二

王羲之と王導が『世説』の中で最初に出会うのが品藻第九28である。しかし、出会うと言っても、羲之を目の前にして王導が具体的に述べているのかどうかは不明であるが、次のような内容である。即ち

王右軍の少き時、丞相云う、「逸少は何に縁りて復た万安に減ぜんや」と。

とある。逸少は羲之の字、万安とは東晋の驃騎長史であつた劉綏^{すい}の字である。劉綏は高平(山東省)の人で生没年は不明である。その劉綏と羲之とを比較して一体どうして羲之は劉綏(万安)に劣るところがあるのか、否、決して羲之は劣るような人

物ではないと王導は確信をもって力強く述べている。また、万安自身は素晴らしい人物であることは、賞讃第八64で、庾亮が絶讃している。即ち

劉万安は即ち道真の従子にして、庾公謂う所の灼然として玉のごとく挙がれるものなり。又云う、「千人にも亦た見^{あらわ}れ、百人にも亦た見る」と。

とある。即ち、万安の素晴しさは光り輝く玉のごとく抜きんできて、千人の中にも目立ち、百人の中にも目立つと庾亮が称えている。この秀れた輝かしい万安と羲之とを比較した時に、どうして羲之が劣るようなことがあるのであろうかということである。

また、同じように庾亮は羲之についても、賞讃第八72で大いに讃えている。即ち、

庾公云う、「逸少は国挙なり」と。故に庾倪碑文を為りて云う、「拔萃国挙」と。

とある。「国挙」とは国家的人材として推挙すべき人物だということ、これは最高の誉め言葉である。そして、さらに庾倩は「拔萃国挙」、即ち国家的な人材として拔擢されたと碑文に記したのである。庾倪は庾倩の幼時の字で、庾亮の甥である。庾亮は万安については絶讃しているが、「拔萃国挙」と碑文に刻することまではさせていない。万安は大勢の人々の中で光り

輝く人物であるが、羲之は国家的人材として推挙されるべき人物、しかも碑に刻す程の人物であると庾亮が評している所を見ると、王導もどうして羲之が万安に劣ることがろうか、否、決して劣ることはない。むしろ羲之のほうが秀れているということを中心の中では説いているのであろう。

「品藻」とは「しなさだめ」の意であり、『世説』の品藻篇は識鑒篇と賞讃篇とともに人物批評についての小話を集めているが、品藻篇は特に比較して論評する手法が多く用いられている。王導は丞相という地位にあり、立場上、多くの人達について論ずることがあり、万安と羲之を比較して、「万安に減ぜんや」などと述べている前述の小話は、その主たるものである。そこで、王導がその他の人物について論じている代表的なものを、品藻篇から引用してみると、先ず品藻第九13に、

会稽の虞駿、元皇の時、桓宣武と同俔、其の人才理勝望有り。王丞相嘗て駿に謂いて曰く、「孔愉は公才有れども公望無く、丁潭は公望有れども公才無し。之を兼ねる者は其れ卿に在らんか」と。駿、未だ達せずして喪す。

とある。「公才」とは三公の位につくことができるほどの才能、「公望」とは三公の位につくことができるほどの声望の意であるが、「公才」は個人の力そのものであるが、「公望」は、当時は家柄の良し悪しの意味合いが強かったようである。東晋の呉

興太守であつた虞駿はこの三公の才能と三公の声望の二つを兼ね備えていたと王導は評している。しかし、比較されているもう一人の東晋の左光禄大夫で、成帝の側近として蘇峻の反乱のとき成帝を護つたことで有名な丁潭には、三公としての声望はあるが、三公としての才能がないと評している。高い地位から見た王導らしい評論である。

また、品藻第九16には

人、丞相に問う、「周侯は和嶠に何如」と。答えて曰く、

「長輿は嵯峨たり」と。

とある。周侯は周顒の別名で、彼は羲之が十三歳の時、牛の心臓の肉を切り取って食べると云つて、宴会の末席に居た羲之に食べさせ、大勢居る名士の中で羲之を見なおさせたことで有名な東晋の尚書左僕射の周顒である。和嶠は西晋太康末の尚書で、恵帝即位の時に散騎常侍、光禄大夫である。「嵯峨」とは山がけわしくそばだっている様子で、近寄りがたい存在ということであるが、羲之を名士の前に紹介した心暖まる周顒の性格とは対象的な和嶠の性格なのであろう。

また、品藻第九18には王導の二人の弟について述べられている。即ち、

王丞相の二弟は江を過らず、穎と曰い、敞と曰う。時論、穎を以て鄧伯道に比し、敞を温忠武に比す。議郎・祭酒たり

し者なり。

とある。江南を渡らなかつた王導の二人の弟、一人は王穎、もう一人は王敞である。この二人のそれぞれの人柄は、王穎は鄧伯道(鄧攸)になぞらえ、王敞は温忠武(温嶠)になぞらえた。鄧攸は字は伯道、襄陵(山西省)の人で、西晋末の河東太守、石勒に捕らえられたが、脱出して江南に渡り東晋の尚書僕射となつた。王穎は鄧攸になぞらえられたが、王穎は西晋の議郎になつた。しかし、二十歳で没したので江南は渡らなかつた。温嶠は字は太真、祁県(山西省)の人で、東晋の江州刺史、平南將軍。蘇峻討伐に功があり始安郡公に封ぜられた。王敞はこの温嶠になぞらえられた。王敞は西晋の丞相祭酒に召されたが自分で就任をこわつた。従つて江南には渡らなかつた。王穎と鄧攸、王敞と温嶠はそれぞれ似たようなタイプの人柄ということであろうか。江南に渡ることを建議したのは羲之の父王曠であつた。北方民族におびやかされ、政權も不安定になつた西晋は、思いきつて長江を渡つて江南の風光明媚な地に移り再興した。これが東晋王朝であるが、王導はその中心的人物であつた。しかし、彼の二人の弟は兄の王導には従うことができなかったのである。その事情はそれぞれにあるようである。

『世説』の雅量第六19は、義之の結婚に関しての小話である。即ち

郗太傅、京口に在り。門生をして王丞相に書を与え、女壻を求めしむ。丞相郗の信に語ぐ、「君東廂に往きて、意に任せて之を選べ」と。門生帰り、郗に白して曰く、「王家の諸郎亦た皆嘉す可きも、来たりて壻を覓むと聞き、咸自ら矜持す。唯だ一郎有り、東牀の上に在りて坦腹して臥し、聞かざるが如し」と。郗公云う、「正に此れ好し」と。之を訪えば、乃ち是れ逸少なり。因りて女を嫁して焉に与う。

とある。結婚に関してはいろいろな形でお互いに相手を決めるのであろうが、義之の場合も世間並みに来るべき時が来たということである。周囲の人達が自然に動いて、無理なく自然に成立させるのであろう。年齢的には明帝の太寧二年（三二四）、義之十八歳頃である。現代では少々早すぎるということであろうが、義之はいろいろな意味で秀れていたので時は熟していたのであろう。この年は謀反を起した伯父の王敦が死んで、王家にとっても新しい時代が巡ってきたということであろう。とにかく義之自身はこの日をほとんど感知していなかったのか、それとも逆に他の誰よりも意識していて飾らない自分を自然に出

そうとしていたのであろうか、義之のその時の気持は表には出されていないのである。しかし、義之本人が知らない所で、結婚の準備は着々と進められていたとも言える。そして、その準備は王家の代表格の丞相王導が仕切っていたのである。ということは、義之は自分自身が嫁を選ぶのではなく、逆に選んでもらうという関係になっていた。即ち、義之は周囲の人々によって選ばれたのである。誰が選んだかというと、東晋の司空であり太尉であり、嫁の父の郗鑒、丞相の王導、そして、郗家の使者の三人であり、その時の義之に直接会ったのは使者のみである。当然、第三者を通しての見合い結婚であり、お膳立てはすべてやってもらい、郗家からの使者が来るというから、義之はただ何となくいつものかっこうをして部屋に居たら選ばれていたのである。王家の若者達がそろって、「咸自矜持」してよく見せようと身なりを一応整え、格好をつけて使者を待っていたが、一人だけ何もしないで「東牀の上に在りて坦腹して臥し、聞かざるが如し」と、即ち、部屋の東側のベッドに腹ばいになったままで、しかも何も耳に入らぬふりをした大変失礼な若様が一人居たという報告を使者から受けた郗鑒は、「正に此れ好し」と快諾したのである。その何もしない無礼な男が何と義之だったのである。

このような形で選ばれた義之の腹中は、一体どのようなこと

だったのであろうか、義之はこの件に関しては黙して語ることなく、幸せ一杯であることには変わりはない。しかし、選ばれようとして矜持して待っていた他の兄弟たちはさぞがっかりしたことであらう。また、郁鑒が使者の報告を聞いただけで決めるということも変わった方法である。使者との信頼関係ということであらうが、ともあれ自分の娘に合った素晴らしい婿は、形式にこだわらない人物で、名前や地位や名誉などの条件で決めるのではなく、人間として暖かみのある骨のしつかりした人物を一発で決めたかったのであろう。後になって名前を調べさせたら義之であったということであって、うまい話であり真相はわからないが、郁鑒らしいやり方である。王家の息子たちのデーターがどの程度郁家に入手されていたかはわからないが、王導に手紙を届け「婿を探して欲しい」との郁鑒の依頼そのものが、すでに王家と郁家の間が尋常ではなく、ごく親密であったことがうかがわれ、王家の息子ならばきつと誰と言わずに素晴らしい人物であるとの考え方に基づいたのであろう。要するに義之は郁家にとって申し分のない人物だったのであろう。

義之の妻になる郁鑒の娘については、王氏譜に

義之妻、太傅郁鑒女、名璿、字子房也。

とあり、郁悒と郁曇の二人の弟がいた。そして、『世説』賢媛第十九25には、

王右軍の郁夫人、二弟、司空と中郎に謂いて曰く、「王家、二謝を見れば、筐を傾け屣を倒にするも、汝が輩の来たるを見れば、平平たるのみ。汝、復た往くを煩わすこと無かる可し」と。

とあり、謝家の兄弟の歓迎ぶり、郁家の兄弟の歓迎の仕方との差を見て、嫁としての実感を述べている。むしろ感情的な言い方をしている所に夫人郁璿らしい人柄が出ている。当時の女性としては郁璿は意識の高い女性で、さすが学問もあり才能も豊かであったのであろう。「二謝」とは劉孝標の注によれば謝安と謝萬の兄弟である。王家は謝家に対しては一目置いていたので、どうしても「傾筐倒屣」のようにあわてふためき、緊張感がただようのは当然である。二謝が来訪すれば客として迎えないてはならないのである。いわば形式的で、ほろを見せないようにして迎えるのが常識である。一方、郁家とは親戚であるから、二郁兄弟が来ても「傾筐倒屣」のようにあわてることなく、冷静にごく日常的に対応するということで何の不思議もないのである。しかし、夫人郁璿に言わせれば、この二つの違いを感情的にとらえているので差が大き過ぎるということであるが、これは身内に対する王家の教育方針である。別に感情論を持ち出す程のことでもないが、郁璿の気持としては最後の「汝可無煩復往」と、二郁に当たり散らすような言い方は感情論で

しかないのである。むしろその前の「平平爾」（平々たるのみ）で止めておけばよかったのである。郗璿のことを積極性のある男まさりの才媛と言われるのはこのあたりから論じられるのであろう。

また、唐の張懷瓘の『書斷』巻中の羲之の項に、

妻郗氏甚工書。有七子。

とあり、郗璿は書にも巧みで書に情熱を燃やしていたことがわかる。そして、彼女は九十歳以上を保ったと言われるように長寿であった。さらに、『世説』賢媛第十九31に、王導の曾孫の王恵（王劭の孫）と郗璿との応答がある。即ち、

王尚書恵、嘗って王右軍夫人を看て、問う、「眼耳未だ悪しきを覚えざるや不^いや」と。答えて曰く、「髪白く齒落つるも、形骸に属す。眼耳に至りては、神明に属す。那ぞ便ち人と隔つ可けん」と。

とある。郗璿が王恵から「眼や耳はまだ不自由を感じませんか」と尋ねられたが、答えて「髪は白く齒は落ちたが、それらは肉体に関する事。眼や耳は精神に関する事だから人とあまり違つては困る」と肉体と精神を分けて答え、肉体はもう年だから変わつてもやむを得ないが、精神はまだ他の人と違つては困るということで、益々健在ということである。七人の子供を育て、正に王家にとつても郗家にとつても誇るべき人物である。

羲之は享年五十九歳であるから、羲之没後約三十年以上を子や孫と幸せに暮したことになる。

四

容止第十四24は、羲之が都へ行き、王導に会つて、武昌（湖北省）での庾亮の言動について語り、その応答について記されている。即ち、

庾太尉武昌に在り、秋夜気佳く景清く、佐吏殷浩・王胡之の徒、南樓に登りて理詠す。音調始めて適なるとき、函道の中に屐声の甚だ厲しき有るを聞く。定めて是れ庾公なり。俄かにして左右十許人を率いて歩き来る。諸賢起ちて之を避けんと欲す。公徐も云う、「諸君少しく住^{とど}まれ。老子此の処に於いて興復た浅からず」と。因りて便ち胡牀に拠り、諸人と詠譚して、坐を竟^おうるまで甚だ樂しみに任ずるを得たり。後に王逸少下り、丞相と言ひて此の事に及ぶ。丞相曰く、「元規、その時、風範小しく顔^{くす}れざるを得ざりしならん」と。右軍答えて曰く、「唯だ丘壑のみ独り存せり」と。

とある。庾太尉は庾亮のこと、字は元規、鄢陵（河南省）の人。東晋の明帝穆皇后の兄、中書令として王導とともに成帝を補佐し、朝廷の実権を握つた。そして蘇峻の反乱の責任をとつて地方官の予州刺史となり、その後、江荆予三州刺史となつた。

『中國人名大辭典』には、

字元規。明穆皇后兄。風格峻整、動由禮節。中興初拜中書郎。侍講東宮。時帝方任刑法、以韓子賜太子。亮諫以申韓刻薄傷化、不足留聖心、太子甚納焉。明帝立、累遷中書監、加左衛將軍。以功封永昌縣公。成帝初徙中書令、蘇峻平。(中略) 征西將軍、鎮武昌、卒諡文康。

とあり、さらに後半は前述の「容止第十四24」が引用され紹介されている。即ち、

亮在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓。亮至、將起避。亮徐曰、諸君少住、老子於此興復不淺。便據胡牀談詠、其坦率多類此。

とある。

東晋成帝の咸和二年(三二七)に、蘇峻が庾亮に叛いて都建康に攻め入ったが、結局失敗に終り敗死した。この謀反が蘇峻の乱であり、その責任をとって庾亮は中央官を辞し予州刺史となり、この小話即ち、容止第十四24は彼が武昌(湖北省)に居たときのことである。ある秋の夜、すがすがしい夜景を前に、南樓にはすでに東晋の中軍將軍、後の揚州刺史で幕僚の殷浩や、東晋の呉興太守、西中郎將、司州刺史を歴任した王廙の子で羲之の従兄弟の王胡之などが登って吟詠していた。喉の調子もよく整った頃に、閣道にカランコロンと下駄の音高く響きわたら

せてくる人達があった。それはほかでもない今はときめく庾亮の一团であった。側近十人ばかりを引き連れて歩いてきたのである。南樓には殷浩や王胡之などの先客が座をとっていたが、立ちあがって席を庾亮たちに譲ろうとすると、庾亮はおもむろに言った。「諸君はまあそのまま動かないで。わたしはこっちに居ても仲々楽しいから」と言うと、庾亮自身は床几に腰をおろして同行の人たちと一緒に吟詠したり歓談したりして、席が果てるまで思う存分に楽しんでた。後に羲之が都へ行き、王導と語りあった際、この庾亮のことを話した。すると王導は「庾亮はそのときつといささか無礼講にならざるを得なかったであろう。」と言った。それに対して羲之は「庾亮の胸中にはすべてを忘れて山水の自然に悠々自適することしか考えていなかったのであろう。」と答えている。

人間が生きていく上で、大きくて困難をとまなう仕事を成し遂げたあとは、その難局に直面し、緊張して処理し進んできた自分を、自分自身の力で見直すと同時に、気分を大きく転換して次の新しい仕事に立ち向い、挑戦しようとするきっかけを掴まなくてはならない。庾亮は中央政府にいて蘇峻の乱を鎮め、そして責任をとって地方官となり、田園や山水の自然に触れ、自分の気持を慰め整理したかったのであろう。それを敢えて自分で行なうのが人間であり、人間として生きている証拠である。

他人の世話にはもうこれ以上なりたくないという気持ちもある。

自分の為に使ってくれる殷浩や王胡之に対しても、もうこのままでよいから、そのままそのままといい精神で彼は「諸君少しく生まれ。老子此の処に於いて興復た浅からず」と述べたのである。その胸中を羲之は汲み取って「唯だ丘壑のみ独り存せり」と、王導に対して答えている。王導の答えは「庾亮は無礼講」であつたが、この答えよりも羲之のほうが深く庾亮の心中に入り込んでいる。「無礼講」ということは間違いないが、少々形式的な見方であり、王導と羲之の感じ方の違いがここに表われている。

また、庾亮が鎮めた蘇峻の乱については、同じく容止第十四²³で触れている。即ち、

石頭の事故、朝廷傾覆す。温忠武、庾文康と陶公に投じて救いを求む。陶公云う、「肅祖の顧命及ぶを見ず、且つ蘇峻乱を作すは諸庾に由る。其の兄弟を誅するも、以て天下に謝するに足らず」と。時において、庾、温の船の後ろに在り、之を聞き、憂怖して計無し。別日、温、庾を勧めて陶に見えしむるも、庾猶予して未だ往く能わず。温曰く、「溪狗は我が悉する所、卿但だ之に見えよ、必ず憂無からん」と。庾、風姿神貌あり。陶一見して便ち観を改め、談宴して日を竟え、愛重頓に至る。

とある。

蘇峻が謀反を起こして都建康に進入したのは東晋の成帝の咸和二年（三二七）であつた。東晋の江州刺史、平南將軍の温嶠ら朝臣は、征西大將軍、荊州刺史の陶侃に討伐軍の総帥となるように要請したが、陶侃は明帝の遺詔にあずからなかったことを恨んで固辞した。しかし、結局陶侃は引き受けて蘇峻を石頭で討つたのである。石頭は建康の西郊で、朝廷は顛覆の危機にさらされた。そこで困惑した温嶠は庾亮と陶侃に救いを求めたが、陶侃は明帝の遺詔が届けられていないこと。それに蘇峻の乱の原因を作つたのは庾氏一族なので、庾亮と庾冰の兄弟を誅しても天下に謝罪しきれないことを力説した。そこで庾亮は肝を冷やしてなすすべがなく、後日、温嶠は庾亮にすすめて陶侃に会わせようとしたが行きかねていたので、「わたしにまかせろ、心配するな」という温嶠の言葉に促されて会うことを決心した。心に決めた庾亮の風姿には神貌がありすぐれていた。陶侃はそれを一目見るなり庾亮を見直し、その後は終日うちとけて話しあつてお互いに敬愛の念がにわかにわいてきたのであつた。そのために蘇峻を討ち乱は解決したのである。

蘇峻は、字は子高。掖県（山東省）の人。永嘉の乱のとき流民数千戸を集めて故郷に壘を築いた。その盛名を聞いた元帝は彼を安集將軍とした。その後、臨淮内史となり、王敦の反逆を

鎮圧するのに功をたてた。やがて歴陽内史となったが、庾亮討伐を名目として反乱を起こし建康に攻め入ったが結局敗死した。元帝に一度は認められ信頼を得ていたのに、功を立てつつ、自分だけの考えに走りすぎてしまったのか残念な生涯であった。

羲之の伯父の王敦の謀反を鎮めた功績は大きかったのに庾亮の手、即ち陶侃の力に屈し、蘇峻の乱の敗者として一生を終ってしまったことは淋しいことであり残念なことである。それにしても蘇峻はどうして庾亮をこれほどまでに嫌ったのであろうか。蘇峻が純粹で真面目すぎる面が多分にあつて、性格面に大きな差があつたからか理解に苦しむことであるが、庾亮の性格については、輕詆第二十六3に僧侶である竺法深が述べたことがある。即ち、

深公云う、「人、庾元規を名士と謂うも、胸中に柴棘三斗許りあり」と。

とある。これは性格を述べるといふよりは、正面から悪口を言っている感じである。庾亮は名士だといわれているけれど、彼の胸の中には、いばらのとげが三斗もつまっているような人物だと言っている。これは大変な悪口であり、庾亮は黙っていてよいのであろうか。しかし、庾亮はどうしてここまで言われなければならないのであろうか。これは一説に、合理的な法治主義者である庾亮が仏教を弾圧しようとしたからののしられた

のだというのである。血も涙もない法治主義者はきつと当時としては嫌われ、憎まれたのであろう。蘇峻もこのような点に疑義を抱き、積もりつもって爆発したのであろう。一般的にも庾亮はひとくせもふたくせもある人物だったようである。

五

「輕詆」とは、「輕」は輕んずる、「詆」はそしる意である。相手を輕蔑してこきおろした逸話を集めたのがこの「輕詆篇」である。単なる輕蔑というよりも、現実的で手厳しく、痛烈であり罵倒に近いものもある。

羲之と王導の二人が登場する「輕詆」の小話は二話であるが、それほど手厳しいものではない。はじめの輕詆第二十六5は

王右軍少き時、甚だ洪訥なり。大將軍の許に在りしとき、王・庾の二公後れて來たる。右軍便ち起ちて去らんと欲す。

大將軍之を留めて曰く、「爾が家の司空なり。元規復た何の難ずる所あらん」と。

とある。羲之が若い頃、と言つても十歳以前の頃であらうか、ひどく口が重かつたということとは、『晋書』卷八十の王羲之伝にも「羲之幼訥於言。人未之奇。」(羲之は幼きとき言に訥なり。人未だ之を奇とせず。)とあり、よく知られていることであるが、これは先天的なものであろう。この輕詆篇では先ずずばり

この点を指摘していて、洪訥がこの小話のテーマとなっている。即ち、義之が王敦の所に居るとき王導と庾亮が後からあらわれた。義之はいきなり立ちあがって出てゆこうとしたので、それを見た王敦は引き留めて義之に指示したのである。この義之の態度は、自分が洪訥というハンディキャップを自覚していたから反射的に、ごく自然になされた行為だったのか、それとも、政界の大先輩である王導と庾亮に対してそこに居たのでは失礼になると思い礼儀をわきまえて退室しようとしたのかは不明である。義之の心中はこの場合にこの両者が考えられるが、この軽詆篇に掲載される内容としたら前者のように解すべきであろう。庾亮の人柄について、前述の軽詆第二十六3の、「いばらのとげ三斗ばかりが胸中につまっているような人物」などと手厳しい評と比較したら、義之の洪訥などは軽詆篇の上では軽いものである。

そして、王敦は義之に伯父としての温情あるアドバイスを送っている。王導、王敦、義之は皆琅邪王家の一族なのだから、たとえ庾亮であつても決してしりごみなどすることはない。堂々としてそのままそこに居なさいということである。王敦のこの家を思つての発言は、義之の心を打つたことであろう。王敦が反乱を起したのは、元帝の永昌元年（三二二）で、王敦五十六歳、王導五十五歳、庾亮三十三歳、そして、義之十五歳頃

であるから、大人が子供に言い聞かせている情景であり、親が子供に教育をしているようにも思える。深刻な雰囲気ではなく心温まる風景ととらえるべきであろう。また、この小話は王敦が謀反を起す以前のできごとであろうが、この内容から王敦と義之との間柄について考えられることは、義之は王敦によって大いに可愛がられていたということである。そして、さらに王家の若きホープとして期待されていたことは、賞誉第八96にある。即ち、

阮光祿云う、「王家に三年少有り、右軍・安期・長予」と。とある。安期は王応の字、王敦の兄の王含の子で、叔父の王敦の養子となり、王敦の武衛將軍となつたが王敦の謀反の時に誅殺された。長予は王悦の字、王導の長子、東晋の中書侍郎で王導には熱く可愛がられていた。なお、安期については、賞誉第八49に自分の子としての評がある。即ち

王大將軍其の児を称して云う、「其の神候可ならんと欲するに似たり」と。

とある。「あいつの精神の反応は、どうにか及第点をやれそうだ」という比較的洪い評である。しかし、長予については王導の溺愛の評が排調第二十五16にある。即ち

王長予幼にして便ち和令なり。丞相愛念甚だ篤く、毎に共に囲碁す。丞相拳行せんと欲するに、長予は指を按えて聴さ

ず、丞相笑いて曰く、「詎ぞ爾^{なん}るを得ん、相与に瓜葛有るに似たり」と。

とある。「愛恣甚だ篤く」とは本当の父子だからであろうか、この溺愛ぶりには丞相王導のある一面を見るようである。長子には特別な情があるのであろうか、さらに、德行第一29にも王導の父親としての一面がある。即ち、

王長予、人と為り謹順、親に事えて色養の孝を尽くす。丞相、長予を見ては輒^いち喜び、敬予を見ては輒^いち嘆^なる。長予丞相と語るに、恒に慎密を以て端と為す。丞相台に還るに、行^いくに及びて未だ嘗て送^いりて車後に至らずんばあらず。恒に曹夫人の与^なに箱篋^{ため}を併^い当^いす。長予、亡き後、丞相台に還るに、車後に登り、哭して台門に至る。曹夫人篋を作り、封じて開^いくに忍^いびず。

とある。長男の長予にはいつも笑顔、次男の敬予にはいつも厳しく立腹するという王導の息子たちへの対し方には異状なものがある。その可愛い長予が両親より早世とは、悲劇そのものである。

さて、王敦が羲之を可愛がったという話題にもどすと、羲之がまだ十歳前の少年のときの逸話が仮譌第二十七7にある。即ち、

王右軍年十歳より減ずる時、大將軍甚だ之を愛し、恒に張

中に置きて眠らしむ。大將軍嘗て先ず出で、右軍猶お未だ起きず。須臾にして錢鳳入^いり、人を屏^{しりぞ}けて事を論じ、都て右軍が帳中に在るを忘れ、便ち逆節の謀を言う。右軍覺めて既に論ずる所を聞き、活^いくる理無きを知り、乃ち剔吐して頭面被褥^ふを汗し、詐^{いつわ}りて熟眠す。敦、事を論じて半ばに造^{いた}り、方めて右軍が未だ起きざるを意^{おも}い、相与に大いに驚きて曰く、「之を除かざるを得ず」と。帳を開くに及び、乃ち吐唾從横なるを見、其の実に熟睡せるを信じ、是に於いて全きを得たり。時に其の智有るを称す。

とある。王敦はいつも羲之を帳の中に入れて眠らせる程可愛がっていたが、思いもかけず一瞬鬼となった王敦は「之を除かざるを得ず」と、とにかく羲之を生かしておくわけにはいかなと思った。実に恐ろしいことである。しかし、王敦がこのように恐ろしいことを考える前に、羲之は既にある機転を利かしてこの危機に対処していたのであった。「右軍覺めて既に論ずる所を聞き、活^いくる理無きを知り」と、このままでは命があぶないと咄嗟に悟って、そして、実に冷静に、「乃ち剔吐して頭面被褥を汗し、詐^{いつわ}りて熟眠す。」即ち、指を喉に入れて吐き、顔や布団をすっかりよごし熟睡しているふりをして、というように次の行動に移せたことは十歳にも満たない羲之の信じられない行為である。もしこの時にこの反射的で賢い行動がなかっ

たら、義之はこの世に名はなかったであろう。当時の人は「時に其の智有るを称す。」と誉めたたえ、後世の人もこれを伝え聞いて大いに義之の智慧を称賛したと言われる。義之はこの時生きる道理は全くあり得ないとぎりぎりの段階に追い込まれた。一人人間はこのようになった時、義之のように次の行動がとれるのであろうか。謀反を起すという反逆陰謀の具体的な話を偶然に聞いてしまい、もう自分の命は助からないと感じても次の瞬間に自分が助かるための行動は凡人には不可能であろう。ただの狸寝入りではなく、熟睡していたと王敦に思わせるために、義之は喉に指を突っこんでへどを吐き、顔やふとんをすべて汚し死んだように眠っているふりをするというのは十歳の子供にはできないと思うが、それをやってのけたという非凡な才を持った義之の少年時代の一コマである。王敦にしてみれば重要な銭鳳との密談をこのような形で人に聞かれてしまったことはやはり油断があったのであろう。また、頭のいい少年義之が王敦は好きでつい可愛がりすぎてうっかりしてしまったのである。しかし、この結果、王敦の謀反の計画が外に漏れたということは伝えられていない。義之にしてみれば聞きたくもない王敦と銭鳳との謀反の協議など、偶然とは言え全くもって大迷惑であったと同時に、何はともあれ命拾いしたのであった。

義之と王導が同時に登場する小話の最後は、次の軽詆第二十

六八である。即ち

王右軍南に在り、丞相書を与え、毎に子姪の令からざるを歎じて云う、「虎狆・虎犢、還た其の如ぶ所なり」と。

とある。義之が南の江州にいたとき、王導は義之に手紙を送り、いつも息子や甥たちのできがよくないことを歎いて言った。義之はこれに答えて「王彭之も王彪之も似たりよつたりといったところで。」とある。虎狆は王彭之の幼時の字、王彬の長子で東晋の黄門郎。虎犢は王彪之の幼時の字、王彬の第二子で東晋の著作郎、吏部尚書、尚書令を歴任した。この兩人の父は王彬で、王彬は王導の従兄弟である。従って伯父にあたる王導が二人の甥のことを心配して義之に手紙を書いたのである。

義之と、王彭之・王彪之の兩人とは、それほど親しい間柄ではない。父親の王彬とも同じ琅琊臨沂の出身であり、王家の一族でありながら『世説』の上での交流はほとんどない。この小話は、やはり王導が間に入つてのことであるが、義之にしてみれば具体的によく知らない二人のことについて、何か言わなくてはならないということは難しいことである。従って、「其の如ぶ所なり」などと適当なことを言っている。父親の王彬は二人については誰よりも心配しているのであろうが、それにも増して伯父王導は義之に手紙を書いてまで心配している。甥のできが悪いことを親以上に歎いているということは、王導のどの

ような心理なのであろうか。王導は前述のように自分の長子に溺愛して甘かったのと同じように、やはり甥たちを可愛がっていたということであらうか。これも王導のある一面を見るようである。また、王導が羲之にこのようなことで手紙を書くということは、それだけ羲之を信頼していたことになる。羲之と王導のある一面を具体的に示した小話である。

さて、今回は、本稿をまとめるに際し、王羲之と王導を中心に見てきた。丞相で太傅の王導は、東晋の元帝司馬睿を補佐し、人間的にも幅が広く、信望も厚く、活力のある存在としてこの乱世を生き抜いた人物だった。元帝は、「あなたの存在は、漢代の初代の丞相で漢の三傑の一人と言われた漢の高祖の功臣の蕭何である。」と賛辞を送っている。

羲之と王導との『世説』における関係は、二人が互いに登場する小話は前述のようにわずかに五話である。王導の小話数は全体で八十七話で、三位に位置し、むしろ多いほうである。しかし、羲之との関係は少ないようであるが、内容が重く、羲之の人生に深く係わっていると言える。

先ず、雅量第六19は、羲之の結婚に関しての内容である。郁鑒の娘、璿と結ばれるが、その機会を作ったのは王導であり、その最初の婿選びの方法を咄嗟に考えたのが郁鑒であり、決断

したのも郁鑒である。形式にこだわりすぎない人物、東牀に何くわぬ顔をして寝そべって居た人物、書生の使者がきても何も耳に入らないふりをしていた人物、これこそが羲之その人だったのである。一見、礼儀に反する羲之の行為だったかもしれないが、そのままの報告を受けた嫁の父郁鑒は「正に此れ好し」の決断だったのである。

品藻第九28は、羲之と王導との最初の出会いであるが、羲之を目前にして述べたかどうかは不明である。即ち、驃騎長史の万安(劉綏)と羲之とを比較した時、羲之は万安に劣ることがあろうか、否、決して羲之は劣るような人物ではないと力説している。この王導の力説は後に何らかの形で羲之に伝えられているのであろう。

容止第十四24は、王導と庾亮と羲之の三人の言動について的小話である。羲之が都へ行った時に王導に会い、武昌で庾亮に出会った時の様子を述べている。庾亮は東晋成帝の咸和二年(三二七)も起った蘇峻の乱を鎮めたが、その責任をとって地方官となり田園や山水の自然に触れ、自分の気持を慰め整理したかったのであろうが、この小話は蘇峻の乱の後の出来事ととるべきであらう。王導は羲之から聞かされたこの武昌の秋の一夜の庾亮一団の出来事を、「無礼講」と評したが、羲之は「丘壑独存」説を論じている。この両人の見解の相違は一目に値い

する。

輕詆第二十六5は、義之の十歳以前のこと、東晋の大將軍である王敦の許に義之が先に居たとき、王導と庾亮が訪問してきた。その時義之はいきなり立ちあがって出てゆこうとしたのを王敦は引き留めて、「同じ王家の司空、丞相の王導ではないか、立つ必要はない。庾亮だつて氣にすることはない。」と、きっぱり義之に言い聞かせた。これは伯父としての義之に対する最高のアドバイスである。そして、ここで問題になるのは、この時義之はどうして立ち上がり退室しようとしたのか、その心中や如何ということであるが、普通は偉いと思われる人物が見えたら失礼して席を外すのが礼儀であろう。しかし、「輕詆篇」ということから考えると、義之の洪訥論も考えられるが、その本当のところは不明である。

そして、最後の輕詆第二十六8は、義之が南の江州に居たとき、王導が自分の息子や甥たちのできがよくないことを心配して義之に手紙を書いた。義之は王彭之と王彪之のことを、「兩人とも似たりよつたりです。」と適当に答えているが、これは義之と王導との信賴關係の深さを物語っている小話である。

王義之と王導の距離は、一見、離れているように見えたが、意外に近い關係にあることを本稿を通して把握できた。伯父の王敦や、庾亮、王彬などの距離も見えてきたことは大きな収穫

であり次稿にも生かしていきたいものである。

(付記)

さて、この度、本稿をまとめるに当り次の文献書籍を参照させて頂きました。最後になりましたがここに記して謝意を標したいと思います。

- | | | |
|------------------------|---------|-------|
| 世説新語(上・中・下) | 目加田 誠著 | 明治書院 |
| 世説新語(上・下) | 竹田 晃著 | 学習研究社 |
| 世説新語 | 森 三樹三郎訳 | 平凡社 |
| 世説新語と六朝文学 | 大矢根文次郎著 | 早大出版部 |
| 晋書 | | 中華書局 |
| 晋書(和刻本正史) | | 汲古書院 |
| 王義之 | 中田勇次郎著 | 講談社 |
| 王義之 | 吉川 忠夫著 | 清水書院 |
| 中国人の機智 | 井波 律子著 | 中公新書 |
| 書苑彷徨 | 杉村 邦彦著 | 二玄社 |
| 書論(第二十八・三十一号) | | 書論編集室 |
| 書道芸術(王義之・王献之) | | 中央公論社 |
| 書道全集 | | 平凡社 |
| 中国書道史の10人(「墨」スペシャル28号) | | 芸術新聞社 |
- (人文学部日本文学科教授)